

多様な表現活動を窓口とした 他者理解と自己へのまなざしの深化

—自律的な学びの主体者を育む単元開発に関する一例—

山本 千恵・石井 信孝・丸子 英美・村上 忠君・岡崎 絵美・松村 梨奈
井上 翔太・枝川 一也・大野内 愛
(研究協力者) 広島大学教育学部 オペラ実習受講生

Abstract: In this study, based on the actual situation and issues of the children in the 6th grade, we decided to launch an art department and work on a musical for the whole grade. We developed a unit based on the idea of Project Based Learning. In this project, we divided our efforts into six phases to help children recognize others and achieve self-actualization. By experiencing the process of working with various others, the children were able to demonstrate their strengths and realize the value of working with others.

1. はじめに

本研究の主たるねらいは、多様な表現活動の経験を通して、子どもたちが自分とは異なる多様なものと生活・共存していくことの意味や価値を自分なりに獲得し、自らの良さを認めながら、自己へのまなざしを深めていくことである。

本学校園は、文部科学省研究開発指定校として、道徳・特別活動・総合的な学習の時間の全ての時数と、各教科の時数から4分の1程度を上限に含んだ新領域「光輝(かがやき)」を設置している。この新領域「光輝」では、高度に競争的でグローバル化された多様性社会に適応するために求められる、3つの次元(躍動する感性・レジリエンス・横断的な知識)の基礎となる資質・能力の育成に向け、単元開発、幼小中一貫のカリキュラム研究開発を行っている。本研究では、第6学年の新領域「光輝」における単元開発について述べていく。

本研究の背景には、本校6年生の実態がある。年度当初、6年生は学校のリーダーとしての自覚をもち、率先して委員会活動や全校での活動に取り組んでいた。

その一方で、他者の思いやアイデアを尊重し

ながら関わりをもつ力、協働して物事に取り組む力には課題がみられた。高学年という発達段階も影響し、不安定な人間関係の中で他者の視線を気にするが故、自分らしさを思う存分発揮できない子どもや、学びに向かう前向きな気持ちを抱く子どもが、伸び伸びと活躍できない場面も時として見受けられる。

さらに、小学1年生から中学3年生の児童・生徒に実施した本学校園独自のアンケート(表1)では、アンケートの全24項目中21項目で6年生の肯定的回答が最も低く、集団の中で自分の長所を生かすことに難しさを覚えている子どもたちや、他者との関わりに消極的な考えや不安を抱いている子どもの姿など、集団としての実態が浮き彫りとなった。

表1 本学校園独自のアンケート項目

(※網掛けの項目は、全9学年の中で肯定的回答が最も低い項目)

	アンケート項目(令和3年7月実施)
1	テストの前には丸暗記をすることがよくある。
2	学んだことに対して、さらに深く考えたり、はっきりさせたりしようとしている。

Chie Yamamoto, Nobutaka Ishi, Hidemi Maruko, Tadakimi Murakami, Rina Matsumura, Emi Okazaki, Syota Inoue, Kazuya Edagawa, Ai Onouchi:

Understanding others through a variety of expressive activities and getting to know more about myself.

3	問題に対して、深く考えて解決しようとしている。
4	自分の考えに間違いがないかを確認しながら考えようとしている。
5	パターンや法則を見つけることに興味がある。
6	苦手なことにも取り組み、できるようになろうとしている。
7	自分の成長のために、難しいと感じることにぶつかったことがある。
8	嫌なことや、つらいことも乗り越えたいと考えている。
9	新しいことに挑戦したいと思う。
10	いろいろな視点から自分と向き合おうとしている。
11	いろいろな視点で物事をみようとしている。
12	友達に考えを伝えたり聞いたりしながら、自分自身や自分の生き方についてよく考えている。
13	いろいろな物事の変化に気がつくことが多い。
14	学校で学んでいることと、自分の将来はつながっていると思う。
15	学校生活の中で課題を見つけようとしている。
16	学んだことを、学校生活や普通の生活に生かそうとしている。
17	学校で学んでいることと、自分の日常生活はつながっていると思う。
18	自分の良いところに気づき、将来の夢や目標をもっている。
19	ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある。
20	人が困っているときは進んで助けている。
21	授業で学んだことを他の学習に生かしている。
22	地域や社会をよりよくするために何をすべきかを考えることがある。
23	学級みんなで話し合っただけ決めたことなどに協力して取り組み、うれしかったことがある。
24	難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦している。

表1のアンケート結果を子どもたちに共有すると、自分たちに足りないのは「コミュニケーション能力」であるという意見が多く寄せられた。

教師は、この「コミュニケーション能力」の育成には、「他者受容」・「自己実現」といった2つのポイントが必要であると考えた。集団の中で、子どもたち自身が、自分の良さに気づいたり他者から認められたりしながら(自己有用感)、自己実現できる経験があって初めて、他者の良さを認め、他者と協働する価値に気づくことが

できるのである。つまり、共に学び、生活する集団として子どもたち同士が高め合っていくには、安心して自己表現・発信が出来る環境を教師が保障した上で、1人ひとりが自律した学びの主体者として他者とコミュニケーションを図りながら、協働的な学習の場を経験していくことが必要不可欠だということである。

以上を踏まえ、本学校園の新領域「光輝」の第6学年に関わる単元開発に着手した。次に、単元開発の視点を述べる。

2. 研究の目的・方法

(1) 単元開発の視点

上述した子どもたちの実態を踏まえ、プロジェクト型学習(Project Based Learning, 以下PBL)の理念を拠り所とし、第6学年の新領域「光輝」の単元開発を行った。

同志社大学 PBL 推進支援センターは、「一定期間内に一定の目標を実現するために、自律的・主体的に学生が自ら発見した課題に取り組み、それを解決しようとチームで協働して取り組んでいく、創造的・社会的な学び。」とPBLを定義している(同志社大学 PBL 推進支援センター, 2012, 巻頭)。

そもそもプロジェクト(project)という言葉は、プロ(前へ・未来に向かって)、ジェクト(投げ入れる)、2つの意味が組み合わさった言葉である。よって、プロジェクト型学習は、学習者自身が、プロジェクトの目標に向かって、様々な方法を試したり失敗を経験したりしながら、プロジェクトを進めていくことと捉えている。

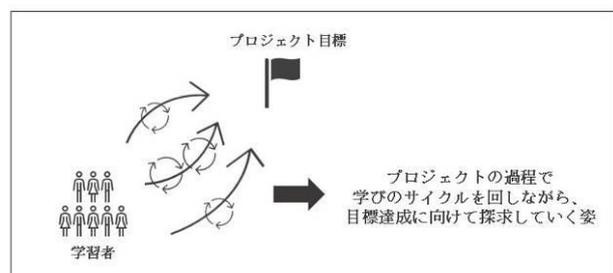


図1 プロジェクト型学習の捉え

目標達成に向かう過程は決して1つだけではなく、学習者の強みや課題によって様々である。先述した子どもたちの課題を踏まえ、自律した学びの主体者として協働しながらお互いに高めていくには、プロジェクトの過程で①学習者がどのように学びに関わるのか、②学習者が

どのように活動の意味を見出すのか、③学びのサイクルをどう回していくのか、この3点が非常に重要である。

(2) 研究の目的・方法

本年度、第6学年の新領域「光輝」では、**芸術科**を立ち上げ、プロジェクト型の学習単位として学年全体での**ミュージカルの創作**に取り組むこととした。芸術科のプロジェクト型学習では、音楽科・図画工作科等の芸術教科や、長年本校で取り組んでいるドラマ教育に基づいた「自己表現力開発」の取り組みを包摂し、教科の学びを柔軟に関連付けながら、多様な児童の思いや願いに寄り添った表現活動の保障を大切にしている。

プロジェクトの達成目標はミュージカルの上演である。ミュージカルはその特性上、様々な役割の働きかけが、上演というプロジェクトの目標達成に欠かせない原動力となる。今回は、表舞台に立つキャストだけでなく、子どもたち自身が大道具や照明、劇中の音楽等、舞台芸術に関わる全ての役割を担うことによって、それぞれの役割がもつ働きや有用性に気づかせるとともに、自律的にプロジェクトへ取り組む意欲を喚起させることをねらいとする。また、ものづくりの過程（成功や達成感、葛藤、停滞、調整、他者との対立、試行錯誤等）を共有することを通して、お互いを尊重し高め合う姿を育んでいきたい。そのような関わりが、学校生活のあらゆる場面にもつながり、「他者受容」・「自己実現」に必要な心の素地を養うことができるのではないかと考えている

3. 芸術科プロジェクト型学習の3つの手立て

先述したように、プロジェクトの過程では、①学習者がどのように学びに関わるのか、②学習者がどのように活動の意味を見出すのか、③学びのサイクルをどう回していくのか、この3点が非常に重要である。この3点を保障できるよう、芸術科のプロジェクト型学習では3つの手立てを講じた。

(1) ミュージカルの役割決め

今回のミュージカルに関わる役割は、キャスト・大道具・小道具・衣装・メイク・照明・音響の7つである。これらの役割全てを子どもたちが担うこととし、役割決定においては、自分

の強みが発揮できる、もしくはチャレンジしてみたい役割を子どもたち自ら選択できるようにした。多様な表現方法を保障し、1人ひとりの興味関心がプロジェクトを進める原動力となることをねらいとした。

(2) 会場設定

教育実習生が宿泊・研修目的に使用する教生宿泊棟全体を、ミュージカルの会場とした。宿泊棟は3階建ての建物である。空間を自由自在にデザインしながら、日常を非日常に変えていく面白さを体感することで、自分たちがつくり上げるミュージカルだという愛着の芽生えにつながるのではないかと考えた。

(3) 学びのサイクルを回すための段階設定

プロジェクトのサイクルを回す中で、活動の目的を子どもたちが見い出すことができるように、ミュージカルの過程をいくつかのフェーズに分けることとした。実際のプロジェクトの過程は以下の通りである（表2）。

それぞれのフェーズにおける、活動の具体を次に述べる。

表2 ミュージカル創作の過程

段階	ねらい	活動・取り組み内容の具体
フェーズ0 (実施日：令和3年7月)	・プロジェクトの最初のサイクルを回すための動機付け ・子どもたちが舞台芸術を作るための様々な役割に気づく	・専門家によるアウトリーチコンサート鑑賞会
フェーズ1 (実施期間：令和3年7～9月)	・プロジェクトの見通しをもつ ・子どもたちが自分の強みを知る	・計画づくり ・役割決定
フェーズ2 (実施期間：令和3年9月～11月)	・それぞれの役割ごとで取り組みを開始し、役割ごとに必要なことを見極める	・役割ごとの準備、制作開始
フェーズ3 (実施日：令和3年11月)	・保護者の方から勇気づけられる評価をもらい、子どもたちのモチベーションとなるようにする	・保護者の方々を対象に、公開リハーサル（第1回上演会）

	<ul style="list-style-type: none"> ・他者から評価をされることで、自分たちだけでは気づくことのできない課題や良さを知る ・観客へ伝わるような工夫を考えるきっかけづくりと、相手意識（観客に対する）の高まりを期待 	
フェーズ4 (実施日：令和3年12月)	<ul style="list-style-type: none"> ・フェーズ3で保護者の方からいただいたアドバイスを具体的に消化していくために、専門家からの評価やアドバイスをもらう 	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回上演会 ・専門家によるアウトリーチ②
フェーズ5 (実施期間：令和4年1～2月)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの取り組みを客観的に見つめ直す 	<ul style="list-style-type: none"> ・試写会
最終フェーズ (実施予定：令和4年3月)	<ul style="list-style-type: none"> ・全校児童や保護者の方々に鑑賞してもらう 	<ul style="list-style-type: none"> ・最終上演 ・取り組みのまとめ

4. 取り組みの実際

(1) フェーズ0 (広島大学教育学部オペラ実習の方々によるアウトリーチコンサート①)

ミュージカルに取り組む前段階として、プロジェクトの最初のサイクルを回すための原動力となるよう、加えて子どもたちが、舞台芸術をつくるための様々な役割に気づくことを目的に、アウトリーチコンサートを開催した。

「アウトリーチ」という言葉は、もともと医療や福祉分野で使用されており、支援が必要な人々の所へ手を伸ばす（支援やサービスを届ける）ということの意味している。つまり、アウトリーチコンサートとは、コンサートホール等の従来の舞台の枠組みを超えて、様々な人たちが音楽に触れることのできる機会を専門家が提供することと捉えている。本研究では、広島大学大学院人間社会科学研究科の枝川一也教授、大野内愛准教授、そして広島大学教育学部のオペラ実習の講義を受講している学生の皆様にご協力いただいた。

ミュージカルやオペラ等の舞台芸術には様々

な役割（大道具・照明・衣装等）がある。そのことを、教師から子どもたちへ伝えることは簡単である。しかし、1つひとつの役割に対する具体的なイメージや関心が無ければ、子どもたちが主体的にプロジェクトを開始することは難しいと考えた。

以上を踏まえ、「それぞれの役割がなければミュージカル・オペラの伝わり方はどのように変化してしまうのか」という視点から、子どもたち自ら舞台芸術の1つひとつの役割に関心を寄せていけるよう、以下のようにアウトリーチコンサートを構成した（表3）。なお、今回のアウトリーチコンサートでは、モーツアルトのオペラ『フィガロの結婚』の第2幕の一部分を演奏いただいた。

表3 アウトリーチコンサート①の構成

内容	ねらい
①広島大学のオペラ実習の方々オペラ劇中の一部を、歌唱と伴奏のみで演奏。子どもたちは、目隠しボードあり・なしそれぞれの演奏を鑑賞（鑑賞1回目）。ここでは歌手の方々の衣装やメイク、大道具や小道具も無しとし、演奏のみを鑑賞する。	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽だけでも物語の様子が伝わることを子どもたちと確認した上で、より観客に物語の様子が伝わるにはどんなことが必要か考えさせる。→<u>舞台芸術に関わる役割の存在を意識させる。</u>
②物語の内容や登場人物について子どもたちと確認し、登場人物にあった衣装を子どもたちが選択する。また、その場で舞台メイクを歌手に施し、子どもたちはその様子を観察する。	<ul style="list-style-type: none"> ・衣装にこだわることで、登場人物の人となりや関係性が観客に伝わりやすくなることを体感させる。 ・「なぜ舞台メイクをするのか」そのポイントを広島大学の方々から伝えていただき、舞台メイクがいかに効果的なのか気づかせる。
③大道具や小道具、音響装置を加え、再度オペラの演奏を鑑賞し、ステップ①との違いを比較する（鑑賞2回目）。	<ul style="list-style-type: none"> ・広島大学の方々の演奏や演技に合わせて、子どもたちが音響の役割を体験できる場を設け、協働して舞台づくりに取り組む面白さに気づかせる。
④照明や背景、字幕を加えたオペラの演奏を鑑賞する（鑑賞3回目）。	<ul style="list-style-type: none"> ・アウトリーチ会場は小学校体育館とした。子どもたちにとって馴染みのある場所が、

	<p>ステップ①～③，そして照明を加えることで，一気に非常へと変わることの面白さを体感させる。</p> <p>・照明が加わることで，登場人物の感情の起伏等，魅せ方や伝え方の幅が広がり，劇中の世界観が高まることを実感させる。</p>
<p>⑤子どもたちが舞台芸術を支える1つひとつの役割について学んだ後，「どのような思いで舞台づくりに携わっているのか。複数の人間でオペラに取り組むために大切にしていることは何か。」これらについて広島大学の方々に語っていただく。</p>	<p>・ステップ①～④までの変化には，表舞台に立つ演者や演奏家だけではなく，目には見えない多くの役割の存在が欠かせない。実際に集団で舞台芸術をつくる方々の思いに触れることで，「自分はどのようにミュージカルづくりに関わりたいか。」・「自分らしさを発揮しながら，どのように活躍できるか。」等について，子どもたちに考えさせるきっかけとする。</p>



写真3 ステップ④ 照明を加えた舞台の様子

アウトリーチ後は，①すごいと思ったところ・②感動したところ・③真似したいと思ったところ・④広島大学の方々の様子から見つけた力，といった4つの観点で振り返りを行った。1つひとつの役割の特徴に気づいたり，豊かな表現力に驚きを覚えたりと様々な感想が寄せられた。さらに，表舞台に立つキャストだけでなく，全ての役割が主役であり，「お互いをリスペクトする気持ちが大切である」と，目には見えない関係性にも言及する子どもの姿があった。



写真1 ステップ② 衣装決めの様子

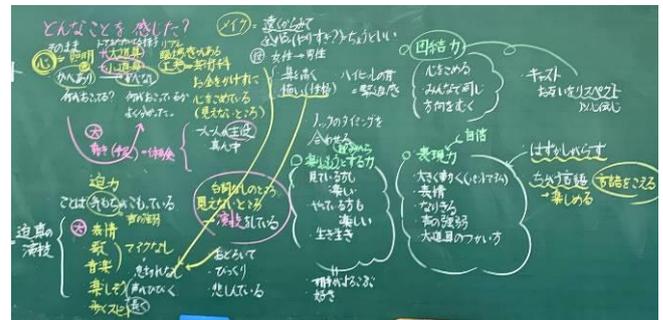


写真4 振り返りでの板書



写真2 ステップ② 舞台メイク観察の様子

- A 児の振り返りから「1つの劇が完成するためには，たくさんの人たちが協力していたことに驚いた。ふつう，劇と言えば，キャスト（演技をする人）が目立っていて，その人たちだけが主役だと思っていたけれど，キャストだけでなく照明や大道具，小道具を作る人，衣装を作る人が協力してオペラを完成させていたからこそ，オペラは感動する。1人ひとりが主人公になっていたことに感動した。これからミュージカルの中で，自信をもつために，たくさん練習や経験を積んでいけばよいことを知りました。とくにぼくは，本番までどのようにしたらよいのか考える計画力を大切にしたい

です。このようなことを大切にしながらミュージカルを完成させたいです。」

- B 児の振り返りから「キャストのみなさん以外にも、大道具、衣装、照明も、大切な役割があるんだなと思いました。理由は大道具がなかったら、その部屋がどんな感じになっているのか分からないし、衣装もその役にあった物を選ばないとその役の特徴が分からないからです。照明はその場面ごとに色を変えて雰囲気を出しているのがすごいなと思いました。キャストの皆さんは表情が豊かで、声がマイク無しでも届くのがすごいと思いました。私は自分の役割をしっかりとこなしているみなさんの姿をみて、私も自分の役割をあきらめずにしっかりとこなしていけたら良いなと思いました。」

(2) フェーズ1 (役割決め・計画づくり)

アウトリーチ後、見通しをもちながら本格的に動き出すために、まずはプロジェクトのゴール時期、取り組み期間、そしてミュージカルの役割決めを行った。アウトリーチコンサートを通して、子どもたちはミュージカルの役割について具体像を描くことができおり、役割決めは、自分の強みが発揮できる、もしくはチャレンジしてみたい役割を子どもたちが選択できるように設定した。

一方で計画づくりが難航した。一旦、プロジェクトのゴール(上演)は令和3年11月19日となった。その日まで、どのように準備を進めていくか想定するも、子どもたちにとっては経験のない初めてのミュージカルづくりであるため、見通しをもつということは簡単ではなかった。まずは手探りで動き始め、必要な準備や制作、練習は何か見極めることが必須であった。

6年生教室前に、役割ごとの仕事の確認やスケジュールの調整を目的としたお知らせ掲示板を作成し、見通しをもちながら動けるように工夫する子どもたちの姿も見られた。



写真5 お知らせ掲示板

(3) フェーズ2 (役割ごとの準備開始)

キャスト・大道具・小道具・衣装・メイク・照明・音響の7つの役割に分かれての本格的な活動が開始した。台本(物語の作成)は教師が制作・準備した。1つの台本をそれぞれの役割の視点から読み、必要な準備は何か、自分たちの役割がどのようにミュージカルへ貢献できるのか考えさせることをねらいとしていた。

このフェーズでは、まず手を動かしながら色々な表現方法を試す時間の確保を保障した。



写真6 メイクの色合いや濃さを試す様子



写真7 衣装づくりの様子

このフェーズでは、キャストの子どもたちの間でトラブルが生じた。練習の過程で、キャストの子どもたちの中で取り組みに対する熱量の“差”が生まれ、一部の子どもたちは「無駄話をする人がいる」「話を聞いてくれない人がいて練習がスムーズに進まない」等の困り感を抱えていた。意見のすれ違いが起こるたびに、話し合いの場を設け、1人ひとりがどのような思いで練習に取り組んでいるのかを語り、お互いの考えに歩み寄ることを重視した。

何度か話し合いを進めていくと、演じ方等の技術的な困り感を抱えている子どもや、他の仕事(委員会活動等)との両立が難しくなかなかセリフを覚えられない子ども、友だちから注意される言葉が強く、間違えると責められたように感じるあまり消極的な取り組みになっている子

どもたちの本音が明らかになった。「ちゃんと練習をしていない」と思っていた友だちが、実は内面に悩みや葛藤を抱えていたと知り、次のようなキャストのきまりが決定した。

キャストのきまり

1. けじめをつけるP
楽しむときは楽しむP
集中するときは集中するP
2. 責めずに優しく声かけをするP
3. 変更があるときは、みんなに確認P
4. 時間を確認しながらやるP
5. 行けないときは、理由を伝えるP

写真8 キャストの決まり

話し合いで出された子どもたちの意見を、教師は「自己統制」「自己主張」「他者受容」「関係調整」といったコミュニケーションに必要な4つの点として整理をした。この4つは子どもたちの取り組みや振り返りを観る教師の視点にもなる。子どもたちがお互いに働きかけながら協働して取り組みを進めていけるよう、表4に示したような具体の姿を、教師は意図的に評価することとした。

表4 コミュニケーションに必要な4つの点

4つの視点	具体の姿
自己統制	自分の感情や行動をうまくコントロールしている。
自己主張	自分の意見や立場を相手に受け入れてもらえるように表現している。
他者受容	相手を尊重して、相手の意見や立場を理解している。
関係調整	周囲の人間関係に働きかけ、良好な状態に調整する。

(4) フェーズ3 (公開リハーサル)

当初の予定では11月19日をミュージカル上演日と設定していた。が、活動を進める中で、役割同士で連携を取りながらプロジェクトを進める難しさに直面したり、より細部へのこだわりをもつ子どもたちが見受けられたりと、当初の期間だけでは満足のいく活動にならないである

うと教師は判断した。そこで、11月19日に公開リハーサルを実施し、保護者の方々にミュージカルの途中まで鑑賞いただくこととした。

公開リハーサルでは、①子どもたちのモチベーションの高まり、②相手意識の芽生え、この2つを主なねらいとしている。①に関しては、保護者の方々に子どもたちを勇気づける評価（良かったところ、更に良くなるための客観的なアドバイス）をいただくことで、自分たちだけでは気づくことのできない良さや課題に出会う機会とした。

また、練習の段階で、キャストを担当する子どもたちは、自分たちの演技に必死で、“観客に観てもらおう”という相手意識が希薄であった。プロジェクトの途中段階で、第三者に伝える場を意図的に設定することは、相手意識の芽生えに対して効果的であると考えた。

公開リハーサル後、保護者の方々からはそれぞれの役割に対して以下のような評価が寄せられた(表4)。

表5 保護者の方からの評価

役割	保護者の方からの評価 (一部)
キャスト	<ul style="list-style-type: none"> ○長いセリフも良く覚えられていた。 ○セリフ忘れも助け合っていてよかった。 ●台本の中の笑いのポイントが、演技の間やタイミングのせいでほぼスルーされていてもったいない。観客の反応を待つことも大切。 ●セリフのテンポ感や抑揚を意識してみよう。 ●感情をこめてセリフを言っている人とそうでない人の違いが伝わってしまう。
大道具	<ul style="list-style-type: none"> ○宿泊棟ならではの場所の雰囲気もうまく取り入れていた。 ○色々な形や色合いが工夫されていて、物語の世界観に溶け込めていた。 ●場面によっては、大道具の装置がキャストの動きにくさの原因になっていたので置く場所や向きを変えた方が良い。
小道具	<ul style="list-style-type: none"> ○時間をかけて、細部までこだわりながら楽しく作業したことが伝わった。 ●観客にも分かるよう大きくても良い。
音響	<ul style="list-style-type: none"> ○楽器をうまく効果的に使っていて、臨場感がありミュージカルのイメージに合っていた。 ●観客にどう聴こえるのか音量やタイミングにこだわると、もっと物語の世界観に集中できる。 ●キャストとのタイミング合わせが大切な

	で、一緒に練習をしてみよう。
照明	○場面の雰囲気をよく出している。 ○キャストが引き立つように光を照らそうとしていることが分かって目を奪われた。 ●話しているキャストにはっきり光を当てると見やすくなる。 ●明るすぎてキャストの表情や場面が分かりにくいことがあった。
衣装	○材料や服をうまくリメイクしていた。 ○着物やカーテンを使った衣装を作っており、面白いアイデアが感じられた。 ●髪の毛のアレンジまで工夫があると、役の違いが分かって見やすい。 ●役の個性がもっと出ても良い。
メイク	○マスクを衣装やメイクの一部としてオリジナルにしており、役に合わせていて良かった。 ●遠くからだメイクをしていると気づかない

※○が良かったところ、●はアドバイス

保護者の方々からの評価を受け、これまでの取り組みについて振り返る機会を設けた。課題の改善方法や今後の練習の方法について考え、練習・制作を再開した。保護者の方々からの客観的な評価に子どもたちは勇気づけられつつも、その改善・修正の過程で、「本当に課題は改善されているのか」、「この方法で良いのだろうか」と、疑問や困り感を抱えている子どもたちの姿が見られた。例えば、キャストの子どもたちは、役柄の感情が観客に伝わるにはどのような立ち居振る舞いをすれば良いのか悩み、照明の子どもたちは、キャストがまぶしくないよう照らすにはどんな角度が良いのか、日々試行錯誤していた。この疑問・困り感の芽生えをきっかけに、プロジェクトは次のフェーズへ移行する。

(5) フェーズ4 (広島大学教育学部オペラ実習の方々によるアウトリーチ②)

再び、広島大学教育学部のオペラ実習の方々にご協力いただき、2回目のアウトリーチを行った。今回のアウトリーチのねらいは大きく2つ。1つ目は、保護者の方々にいただいたアドバイスを解決する具体的な方法について、専門的な知識・経験をもつ広島大学の方々から教えていただくことである。その際、子どもたちにとって“実現可能な”アドバイスをしていた

だくよう、教師と広島大学の方々とで連携を図った。事前に、国語科の学習単元「メールの書き方」を活用し、子どもたちは広島大学の方々に教えていただきたいことをメールの文面にまとめた。文面を作成することにより、自分たちが抱える今の悩みや難しさ、できるようになったことを改めて振り返ることができた。広島大学の方々には、子どもたちが作成したメールの文面だけでなく、これまでの子どもたちの取り組みの姿（成功や達成感、葛藤、停滞、調整、他者との対立、試行錯誤等）、コミュニケーションに必要な4つの点（「自己統制」「自己主張」「他者受容」「関係調整」）についても共有し、子どもたちの姿を見とっていただく視点の整理も行った。よって、アウトリーチの2つ目のねらいは、舞台づくりの専門的な知識を教えていただくことだけでなく、子どもたち同士が関わりをもちながら協働している姿を、教師以外の外部の方々にも評価していただくことである。

アウトリーチでは、まず広島大学の方々にミュージカルを観ていただき、その後役割ごとに分かれて具体的なアドバイスをいただいた。事前に共有していたメールの内容を踏まえ、子どもたちの困り感に寄り添っていただき、より良いミュージカルとなるための新たなアドバイスをいただいた。



写真9 ミュージカルを鑑賞していただく様子



写真10 照らし方のコツを教わる様子(照明係)

また、広島大学の方々からは、子どもたち同

学部のオペラ実習の方々，そして全校児童に最終上演を鑑賞してもらう予定である。

5. 成果と課題

本プロジェクトは，新型コロナウイルス感染症の影響により，令和4年3月現在，活動途中にある。よって，現段階までの取り組みを踏まえて，次の2つの視点でプロジェクトの成果と課題を整理する。1つ目は，芸術科のプロジェクト型学習が，子どもたちが自分たちの課題として挙げていた「コミュニケーション能力」，そしてその育成に必要な「他者受容」「自己実現」に，いかに効果的であったかという視点である。

取り組みを通して，今回のプロジェクト型学習には，上記の育成へとつながる3つの特徴的なポイントが明らかとなった。

(1) 多様な表現機会の保障

様々な教科の学びが，ミュージカルづくりを支える土台となっている。特に今回は，図画工作科・音楽科・国語科・家庭科，そして本学校園が長く取り組んでいるドラマ教育(演劇教育)を基盤に，ミュージカルの実現に向けて，子どもたちが教科・領域の学びを柔軟に関連付けながら応用的に用いる機会となった。また，今回のミュージカルでは，子どもたち自らが選択決定権をもち，自分に合ったもの，心惹かれる表現(役割)を選ぶことができるという手立てを講じたことにより，興味関心を支えに自らの強みをさらに伸ばすことにもつながった。失敗を経験したり課題にぶつかったりしても，粘り強く再考したり，より良いものを追求したりする姿が多く見られた。

(2) アイディエーションとプロトタイピング

ミュージカルづくりの過程では，「体を動かしながら様々な表現方法を試しやすい」・「協働的な過程を仕組みやすい」という2つの強みが見られた。これは，デザイン思考の考えに通ずるものである。デザイン思考は，ブレインストーミングなどを活用し，チームが協働することによって生み出される集合知を重視したアイディエーションと，短時間に多くのアイデアを試し，改良するために，頭だけではなく手を使ったり，体を動かしたりしながら考えるプロトタイピング等の手法を取り入れた思考法であると，前野(2014)は定義している。

見通しを持ちながら活動することはプロジェクトを進める上でももちろん重要だが，思い付きや発見もプロジェクトの発展を促すきっかけとなる。つまり今回であれば，思いつくまま色や形に表したり，音として表現したり，言語化したりすることで，当初予想もしていなかったアイデアや工夫が生まれ，取り組みが豊かになることもある。

教師の手立てとして，試行錯誤しやすい環境を設定すること，子どもたちがプロジェクトの過程で失敗しても安心できる環境を保障することも重要である。PDCAのようなしっかりとしたサイクルだけでなく，「フェールファースト」，早い段階で失敗してまたやり直す，その経験もプロジェクトのサイクルを回すために必要な視点である。

(3) 自らの創作物・アイデアの見える化

自らの創作物・アイデアの見える化とはつまり，自分の制作した物，そして考え出したアイデアがミュージカルを構成する欠かせない要素となり，多くの人々の目に触れるということである。

今回のミュージカルであれば，色や形，素材等にこだわりながら制作した大道具や小道具は，舞台の情景や場面設定を伝える要素となる。衣装やメイクは，キャストの人となり・キャスト同士の関係性・感情等を観客に訴えかける。音響や照明は，舞台の雰囲気盛り上げたり，変化させたり，目には見えないキャストの感情を想像するヒントとなる。このように，子どもたちのこだわりや試行錯誤を重ねたプロジェクトの過程が，他者に“見える”形で表出するのである。



写真12 大道具係の制作した舞台背景・装置

本プロジェクトの成果と課題を整理する2つ

目の視点は、芸術科のプロジェクト型学習を通して、子どもたちが他者と協働する価値をどのように見出ししているか、そして自分らしさを見出しながらも他者との関わり方をどのように調整していたかである。

プロジェクトの過程では、他者との関わりにおいて、自分なりの思いやり（相手意識）をもって接し方を工夫する姿が多く見られた。以下の振り返りに見られる姿である。

- 「友だちのアドバイスやいいなと思ったことには『すごいね』『いいじゃん』と伝えて、友だちの意見を受け入れたり良さを見つけたりできた。『何か手伝うことはある？』と聞いて、自分の役割を自分から探すこともできた。」
- 「自分の意見に他の人の良いところを取り入れて提案することができた。」
- 「使いたい道具があったら、『使っても良い？』や『あとで使うね』とか、細かいことかもしれないけど一言を付け加えることができた。」
- 「他の人と楽しくできるように、作業の邪魔にはならないよう気を付けながら少し話しかけることができた。」
- 「意見が違って、自分だけが正しいと考えずに、他の見方から考えて、もっと良い意見を提案することができた。」

一方で、他者に歩み寄り協働する価値に気づきながらも、その難しさを自分自身の課題と語る子どもの姿もあった。

- 「自分のはっきりと意見をいうことはできたけど、自分とは違う友だちの意見を肯定したり受け入れたりすることができなかった。」

さらに一部の子どもたちには、他者との関わりを通して自分自身に見についた力や、自分の成長につながる視点で他者との関わり方を模索する姿も見られた。

- 「自分がつくった衣装がキャストの人たちにとって動きにくくないか、寒くないかなど着る人のことを考えながら修正することができた。他の人のことを考える力がついたと思う。これから掃除をするときなどに、次に教室を使う人が気持ちよく使えるためにどうすれば良いか考えることができると思う。」
- 「友だちの意見を受け入れる時に、ただ聞

いて終わりではなくて、自分の考えの参考にしたり、その考えは自分とどう違うのかを考えたりすると、自分につく力が増えると思う。」

上記のように、相手のことを考えた上で自分自身の言動や関わり方を選択・判断しようとしている子どもたちは、プロジェクト全体を推進・発展させるための大きな原動力となっている。そして、他者と協働する価値を、“自分や集団にとって有益で欠かせないもの”と定義するのであれば、例にあげた子どもの姿は、自分の働きかけが集団活動にどのような効果をもたらすのだろうかと思いを働かせ、他者を慮っている姿とも言える。

一方で、他者を受け入れ理解すること以前に、自分自身を理解すること、思いを表出することに難しさを抱えている子どもたちの立場をより配慮し、自分自身と対話できる場の保障を柔軟に検討すべきであった。具体的には、最初から他者と協働するだけではなく、まずは1人で取り組みを開始し、「分からない・できない」等の不安・困り感も含めた自分の手応えを、自己理解のきっかけとするなど、プロジェクトへの関わり方をより柔軟にする視点も必要であった。また、フェーズ2では、台本を読み解き、自分たちの役割に必要なことは何か手探りで見つける段階を設定していたが、ある種その自由度が苦痛となっていた子どもたちがいたかもしれない。集団の中で汲み取ることのできなかつた1人ひとりの実態に目を向け、活動の余白を設定する手立ての検討が、今後の大きな課題である。

引用（参考）文献

- 1) 同志社大学 PBL 推進支援センター（2012）「自律学習意欲を引き出す！ PBL Guidebook～PBL 導入のための手引き～」『同志社大学 PBL 推進支援センター』, 巻頭
- 2) 前野隆司（2014）「システム×デザイン思考で世界を変える～慶應 SDM『イノベーションの作り方』～」日経 BP 社
- 3) 藤原さと（2020）『『探究』する学びをつくる社会とつながるプロジェクト型学習』平凡社